


1. 年間目標について

- (1) 積極的に入居者とかかわり、“いつもと違う”と云うことに気付ける看護師になれるよう、観察力やアセスメント力に注視してきた。
- (2) 感染症対策については、これまで同様、情報や通知等を漏れなく収集し、知り得た情報は適宜現場に周知することを徹底、感染防止に努めてきた。また、それらに係る研修会へ積極的に参加してきた。
- (3) 持病があっても健やかで快適な毎日が送れるよう、苦痛を取り除き、「して欲しいこととは何なのか」を念頭に支援してきた。
- (4) 終末期においても施設生活が安心して送れるよう、多職種間との協働体制を整え、必要とされる知識や技術についてもともに学習し、最期まで寄り添ってきた。
- (5) 職員の健康管理にも留意し、定期健診は基より個別の相談などにも対応できるよう専門知識の向上と時節に合った管理指導に努めてきた。

2. 入居者及び職員の健康管理について

<p>健康管理について (入居者)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 健康診断 令和5年5月1日、11月6日 入居者45名受診、内有所見者35名。要精検者については診察時に確認している。 ➢ 国が定めるところの新型コロナワクチン接種への取り組みは、保健師の指示の下、あづま脳神経外科チームにより執り行われた。名簿の作成から手順、当日の采配を担った。 家族への連絡、同意確認、考えられる副反応については事前に電話連絡で了承を得る。(令和5年5月8日より感染症法上の位置づけが、5類感染症に移行) ➢ 入居者の新型コロナ罹患患者及び、インフルエンザ罹患患者はゼロであった。 ➢ 新型コロナウィルス感染症が5類感染症に移行したが、制限される事態が生じた際には、必ず家族へ一報入れ、解除の時も近況と共に面会の案内など報告している。 ➢ 抗原検査 延べ人数52名に検査施行
<p>職員の体調管理について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 介護職員の平均年齢も高く、柔軟性と筋力の低下が目立ち、体調不良を訴える職員が目立っている。 ➢ 腰痛対策については、予防法と介護技術の修得及び、福祉用具の購入(個人購入も含め)腰部にかかる負担軽減に努めた。 ➢ 職員のインフルエンザ罹患患者は2名。新型コロナについては罹患患者9名を確認。が、これまでの知識を生かしたことで感染源の拡散には至らなかった。定められた隔離期間を経過し、医師の指示の下、抗原検査陰性を確認後、復帰している。 ➢ 新型コロナワクチン接種の取り組み、上記、入居者と同様に実施。 ➢ 同居家族に感染している職員については、出勤前に抗原検査キットにて検査。陰性を確認後、出勤とした。 ➢ 抗原検査 延べ数 11名に検査施行
<p>健康診断について (職員)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 健康診断 1回目 令和5年5月1日 45名が受診。 2回目(夜勤に従事する職員のみ) 令和5年11月6日、23名が受診。共に検診率100% 施設外での健診を受けた職員については、結果の写しを医務室管理とした。

	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 職員の3分の1が再雇用となっている。についてはその殆どが何らかの慢性疾患があり、内服薬の処方を受けている。他、それぞれ指摘された事項について相談と病院受診の必要性を説き、対応している。 ➤ 腰痛検査（年2回）については、問診票で調査。半数近くは接骨院などに通院しているのが実情。 “総合的に心配なしと判断”という結果が殆どであった。 ➤ 体調不良にて入院、自宅療養を余儀なくされた職員は1名いたが、医療機関の定めた休養を経て復帰に至る。
<p>健康教育について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➤ オンライン研修のほか、感染予防に努めたうえで外部での研修も行った。 ➤ 自身の体調管理については個別に相談を受けるなど、健康に関する関心を高めてもらえるよう努めた。 ➤ 感染症委員会（BCP）には固定した看護師が就き、施設内研修として年に2度開催している。 5月には吐物処理（演習の実施）、明けて年2月には感染者発生時の対応を考え、そのゾーニングの方法、物品保管場所の確認をデイスカッションしながら行った。 また、その都度シミュレーションを取り入れ、多職種間で共有できるようにした。 
<p>受診について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 救急車搬送は1件、介護と看護間の連携と情報を共有することで、比較的速やかな対応ができた。（手遅れという状態は避けられた） ➤ 重症度の高い入居者についても主治医の指示の下、家族への連絡を密にするなど信頼関係を築くことができた。 ➤ 診療については、いいたてクリニックから毎週火曜日に回診と定時薬の処方を受けていた。慢性疾患のみならず、臨時薬や点滴の処方もあり、施設内で寛解できたことは何よりであった。

3. 褥瘡対策について

<p>皮膚トラブルの予防</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 早期発見の重要性を周知する。また、速やかな報告が重度化を防ぐことに繋がることも付け加え指示できた。 ➤ 皮膚トラブルがもたらす2次的疾患の特性については、各家会議に参加することで知識を広めることができた。 ➤ 長年の課題であったスキンテア（皮膚が薄くなりほんの少しの刺激でも裂創や皮下出血を起こしやすい）への対応として『アルギーナ』に代えて摂取試みをした。効果が表れ、駆血帯を巻いても内出血は起こらなかった。 ➤ 除圧マット・ムートン・ロンボクッションをはじめとする体圧分散用具の導入をしてきたことで終末期に於いても褥瘡はゼロであった。 ➤ 栄養の大事さ、経口摂取がもたらす効果については適宜ケア会議などで話し合い、関心を深めていった。 ➤ 基礎疾患があり抗凝固剤の処方を受けている利用者については、その内容も周知し、皮膚に与える影響についても指示できた。 ➤ 看護師間で検討し、保護剤や被覆材の選択については互いの情報を共有するにとどまった。次年度は開催される勉強会などに積極的に取り組んでいきたい。
------------------	---

4. 終末期ケアについて

看取りについて	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「慣れ親しんだホームで最期を」と希望する入居者や家族が多く、10名の方が施設内の自分の居室で永眠されている。 ➤ 感染予防策として限られた面会の中、最期の面会だけは寄り添うことを可能とした。一人で逝かせたくないという職員の思いからでもあった。そして、できるだけ悔いが残らないように配慮することで信頼関係を継続できた。 ➤ 終末期を考慮し、事務・厨房・介護・看護の全スタッフで関わる事ができた。 ➤ 主治医である本田医師には毎週火曜日の定期診療に加え、深夜早朝にもかかわらず対応していただき、最期の確認と家族への説明をして頂いた。
---------	---

5. 予防接種

【新型コロナウイルスワクチン接種】

6月1日		11月9日		※ 入居者の家族意向あり
6回目	職員 44名 入居者 44名	7回目	職員 45名 入居者 45名	

※上記は施設内で接種を行い、時期をずらしての接種はいちばん館にて3名行っている。
 ※副反応については、おおむね熱発のみ。呼吸困難などの重症者はゼロ。

【インフルエンザ予防接種】

11月26日 入居者45名 職員47名

施設内で接種。副反応者なし。(2名の入居者については、家族希望により非接種)

6. 通院状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
うめだ泌尿器科	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3
あづま脳外	0	0	0	1	2	0	1	1	0	1	1	1	8
いいたてクリニック	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	3
済生会川俣	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
くまがみ歯科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
マルイ眼科	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	1	0	4
府野歯科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
公立藤田総合病院	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	2
鈴木歯科	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
南相馬市立病院	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大町病院	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
延人数	0	1	2	3	3	2	2	3	1	2	2	3	24名

7. 入院状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
あづま脳外科実日数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	10日
大町病院実日数	0	0	0	0	0	0	0	17	0	0	0	0	17日
実人数	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	2名